
はじめに

15年間ロングセラーとして多くのTOEFL受験者を中心にご愛読頂いた『TOEFL®TEST 必須英単語5600』が新しくなりました。「聞く・読むを通して文脈から単語を定着させる」というコンセプトは変わらずぶれることはありませんが、iBTという難解なテストにさらに奏功するにはどう進歩すべきかという点を本書に具体的に盛り込みました。

TOEFL® iBT が実施されるようになって20年ほどが経過し、出題形式・傾向もやっと落ち着き、日本の受験者もようやく腹をくくってこのかなりタフな英語力判定テストに正面から立ち向かう気持ちになってきたようです。生徒さんのクラスでの雰囲気やスコアの伸びからもそれが感じられます。何とか他の試験で代替するのではなく、「難しいけど方法はある」とiBTに対して前向きになってきたようです。

既に受験された方はご存知のように、iBTは受験者の英語運用力を読む・聞く・話す・書くの4つのセクションで試すシステムですが、ワンレベルで難度が高いという点で、非常に趣旨は一貫しています。つまり英語圏の大学・大学院といったアカデミックな場面で支障なくやっていける英語運用力の有無を判定するという趣旨です。ある意味でiBTは理想を追い求めた試験であり、本音のテストだと筆者は思います。「易しいものは出しませんよ」というテストだと考えていいでしょう。しかし、厄介なことに「やってやるぞ」と覚悟した受験者は必ず単語という壁に突き当たるのです。

iBTは難度の高いワンレベルなので、出題内容のポイントとなる単語のレベルも常に高いままです。この難度の高い単語群を攻略しなければ、iBT100(5.5.5)といった高みは越えられません。だからこそ、単語は覚えるしかないのだと覚悟したTOEFL受験者を具体的に助けて、難解で覚えにくい単語の語義や綴り、発音を可能な限り印象深く有機的に彼らの記憶に残すことが、本書

がやるべきことなのです。

『TOEFL®TEST 必須英単語5600』が15年間ロングセラーとして果たしてきたことを、さらに研ぎ澄ませ増幅するにはどの部分を強化すればよいのかと、生徒さんや読者のみなさんの反応から模索し続けた結果として本書[改訂3版]が生まれました。新傾向に対応しているのはもちろんのこと、iBT本試験に毎回のように出題される単語群の追加をはじめ、それらの単語群を含む頻出ジャンルの英文の追加、会話問題や Speaking でも奏効するキャンパス用語リストなど、読者のみなさんの夢に対する覚悟を形にする道具はすべて本書に含まれています。iBT は難しい、無理かなとやや弱気になったときこそ、本書のページをめくり、音声を聞いて、大声でシャドーイングしてください。歩みをやめなければ必ず目的地に着くはずですよ。

2026年1月、もうすぐ冬至という夜半に 林 功